

N. M. カラムジンとイギリス

—18世紀後半のロシアにおけるイギリス文化の受容について—

白 倉 克 文

基礎教育課程

On N. M. Karamzin's Attitude towards English Culture

—A Case of Russians' Acceptance of English Culture in the Late 18th Century—

Katsufumi SHIRAKURA

Division of Liberal Arts and Science

(Received October 31, 1996; Accepted January 10, 1997)

I. はじめに

エカチェリーナ2世の時代（在位1762～96年）はロシアとイギリスの文化交流が軌道に乗り、飛躍的な高まりを示した時期であった。この時期ロシアは、女帝がイギリス文化に深い愛着を寄せていたことも幸いして、イギリスの文物を積極的に取り入れ、また多くの若者を派遣して、様々な文化領域にわたって、イギリスに直接学ばせた¹⁾。文学に関しても、古くはシェイクスピアから新しくはスターンに至るまでのイギリス文学が、徐々にではあるが着実にロシアに紹介され、少なからぬ影響力を及ぼすに至った。18世紀も終盤を迎える頃には、イギリス文化に対する理解と関心はロシアにおいて相当高い水準に達していた。一部の人々はイギリス文化を深く理解し、時に共感しつつ、また時に反感を覚えつつ、それを摂取して自己の創作活動に生かそうと努力を重ねていた。そうした思想家・文学者の典型としてニコライ・ミハイロヴィチ・カラムジン（1765～1826年）²⁾の名を挙げることができる。本稿の目的は、彼の著作の検討を通じて、18世紀後半のロシアでイギリス文化がどのように理解され、どのような作用を及ぼしたかを探ることである。当時のロシアのほとんどの文化人と同様、カラムジンもイギリス以外の西欧諸国の思想家から多くを学んだのであるが、ここでは対象をイギリスとの係わりだけに絞って考察してみたい³⁾。

カラムジンは一般にはロシア・センチメンタリズム文学の代表者として知られているが、彼は詩人・翻訳家・小説家であっただけでなく、評論家であり、編集者であり、そして歴史家でもあった。ジュコフスキー、プーシキンら、次の世代の文学者に多大な影響を与えもしたし、また言語改革者としての業績も特筆に値する⁴⁾。若年よ

り晩年に至るまで彼は精力的に著作活動を展開したが、その大きな特徴として、活動領域が多岐に渡ったこと、そして、年齢と共に作風に顕著な変化を示したこと、を指摘することができる。1792年発表の『哀れなりーザ』⁵⁾はセンチメンタリズム文学の傑作として広く読まれ、与えた影響も大きかったが、それ以降に書かれた小説のいくつかは明らかにそれとは異質の、センチメンタリズムの範中に収まりきらない性質を帯びており、その後のロシアの文学の新しい流れを先取りしていたとも言える。しかも、晩年の20数年間は文学・評論活動からほとんど身をひいて、歴史の研究に専念し、ついには『ロシア国史』の大著を刊行した。このように彼の創作活動は変化に富む軌跡を示したのであるが、イギリス文化に対する彼の対応の仕方も同様に複雑で変化に富んでいる。したがって、彼とイギリス文学との係わりを調べ、また、イギリスを訪問した際の彼の心情の流れを辿ることによって、創作上の変化の遠因をある程度汲み取ることができるように思われる。

カラムジンに関する研究は、ロシアでは主としてイデオロギー上の理由によって、長らく低迷していたが、近年活発になってきている。欧米では比較的古くから研究が進められてきたが、最近特にアメリカで盛んであり、彼をテーマにした著作の刊行が増加を示している。日本でも活況を呈しており、高水準の研究が発表されつつある⁶⁾。そうした成果に学びつつ、考察を進めてみたい。

II. 18世紀ロシアにおけるイギリス文学受容の状況

1

カラムジンが生まれ育った時期にイギリス文学がどの程度ロシアに紹介されていたかを知るために、先ず18世

紀における両国の交流史を概観してみよう。両国の関係強化に大きく貢献した最初のツァーリはピョートル大帝(在位1682～1725年)であった。彼は自身も含む大使節団を1697年にヨーロッパに派遣したが、イギリスにはその翌年に訪問し、数ヶ月滞在した。ここで彼は特に造船術・航海術に関心を示し、この分野での多くの優れた人材を連れて帰国した。イギリス技術の先進性を認識したピョートルはその後イギリス人の招聘に努めた。例えば1701年設立の数学航海学校の長として任命したのはスコットランドの学者 H. ファーカソンであったし、また運河の建設計画を推進するために招いたのは水力工学者 J. ペリーであった¹⁾。

イギリスに学ぶことへの強い志向性を継承した次のツァーリはエカチェリーナ 2 世であった。ピョートルと同様イギリス文化を高く評価した彼女は両国の友好関係を強化し、人的交流を促進する政策を遂行した。その結果彼女の在位中に国政レベルでの交流手段が次第に整備されるに至った。ロンドン在留ロシア大使館の活動も軌道に乗り、この期間中に在任した 6 人の大使はいずれも熱心に任務を果たしたが、特に最後に務めた S. R. ヴォロンツォーフは両国の関係改善に大いに貢献した²⁾。この時期にはロンドンでのロシア正教会の活動も盛んとなり、特に二人の司祭 A. A. サムボルスキーと Ia. I. スミルノフは布教活動だけでなく、両国間の幅広い親善活動にも携わった³⁾。こうした状況の中で、文化面、技術面での人的交流の機会も飛躍的に増大した。ロシアに出向いて活動するイギリス人の活躍ぶりには目を見張るものがあったし、また一方、イギリスで先進技術を修得して帰国したロシア人の活動もめざましかった。彼らの修得技術は農業、造園、航海術、建築、運河設計、医学、通商、芸術、演劇、貨幣鑄造等々、きわめて広範な分野にわたっており、イギリスの進んだ技術が彼らを通してロシアに移植されることとなった。エカチェリーナ没後、パーヴェル 1 世の即位によって、両国の関係は短い冬の時代を迎えるが、概して 18 世紀後半はロシアがイギリス文化を受容するのに頗る好都合な時期であったと言える。

2

次にイギリス文学がロシアに紹介された過程を駆け足で辿ってみたい。イギリス人を著者とする英語の出版物がロシア語に翻訳された件数は 1741 年から 1800 年までの 60 年間で 245 点であり、そのうち英語の原文から翻訳されたものは 48 点であった⁴⁾。これらの翻訳書の主流を占めたのは実用書であったから、文学作品の翻訳件数はごく限られたものであったと考えられる。イギリス文学のロシアへの紹介が多少なりとも軌道に乗ったのはエカチェリーナ時代になってからとすることができよう。

早くからロシアに知られた詩人として J. ミルトンと A. ポープがいる。A. ストロガノフが 1745 年にフランス語版から訳したミルトン作『失樂園』は刊行されずに終わったが、ロシア語に翻訳された最も古い文学作品の例であった。ポープの『人間論』は N. ポポフスキーによって 1754 年にフランス語版から翻訳され、1757 年に刊行されているが、それは好評を博して、その後も版を重ねた⁵⁾。60 年代に入ると D. デフォー著『ロビンソン・クルーソー』が Ia. トルーソフによって翻訳されて、1762 年に第 1 部が、64 年には第 2 部が刊行された。フランス語版に基づく不完全な翻訳であったが、この作品はロシアで人気を博し、1814 年までに 5 版を数えた。少し遅れて H. フィールドिंगの著作が紹介され始めた。1766 年に V. ゴロトニツキーが『この世からあの世への旅』をドイツ語版から翻訳したし、1770 年には『トム・ジョーンズ』の 2 種類の翻訳が刊行された。特に E. ハルラモフによるフランス語版からの翻訳はフィールドिंगの名声をロシアで高めることとなった⁶⁾。

70 年代からロシア人の心を深く捉えたイギリス詩人として E. ヤングがいる。彼の『夜想』は M. スニコヴァによって 1772 年に雑誌「夕べ」に、また 1778 年には A. クトゥーゾフによって雑誌「朝の光」に、翻訳掲載された。80 年代以降もヤングの名声はますます高まり、数種の作品集が刊行され、また書簡が翻訳された⁷⁾。70 年代にロシアで注目されたもう一人の作家は J. スウィフトで、『ガリヴァー旅行記』は E. カルジャヴィンによってフランス語版から翻訳され、1772～73 年に刊行された⁸⁾。70 年代はまたミルトンとポープがロシアで再人気を得た時期でもあった。1777 年には V. ペトロフによる原文からの『失樂園』の翻訳があり、翌年にはフランス語版から『復樂園』が翻訳され刊行された。一方ポープも『人間論』を中心に著作がしばしば紹介された⁹⁾。

80 年代前半から翻訳されて人気を博したイギリス詩人が二人いる。一人は J. トムソンで、代表作『四季』の部分訳が、先ず 1781 年に、次は 1784 年に、いずれもフランス語からの重訳で雑誌に発表された。1787 年からは英語からの翻訳がカラムジンによって続けられ、その成果は児童雑誌「心と理性のための子供の読物」に順次掲載された。『四季』の翻訳はその後続けられ、1798 年に、D. ドミトレフスキーによる全訳が刊行された¹⁰⁾。もう一人は T. グレイで、代表作『哀歌』の翻訳は、1784 年に最終エピタフが、そして翌年には原文からの全文訳が「憩う精勤の人」誌に掲載された。1789 年には「対話する市民」誌にフランス語版からの別の全訳が発表された。『哀歌』への関心はその後も続き、V. A. ジュコフスキーの文壇デビューとなった「ヨーロッパ報知」誌上への翻訳発表

(1801年) へとつながっている¹¹⁾。

1780年代も後半になると、近代小説の始祖ともみなされるイギリスの散文作家群の著作がロシア語に翻訳され始める。O. ゴールドスミス『ウェイクフィールドの牧師』はN. ストラホフによって1786年に、T.G. スモーレット著『ペレグリン・ピックルの冒険』はA. グリボフスキーによって1788年に抄訳され、S. ジョンソンの『アビシニアの王子、ラセラス』も1795年に完訳されている。後のロシア文学への影響が極めて大きかったS. リチャードソンとL. スターンの著作の翻訳もこの頃に始まった。リチャードソンの『パメラ』はP. チェルトコフによって1787年に翻訳が発表され、1796年には別の訳も刊行された。『クラリッサ』は1791～92年にN. オシポフとP. キリジェシェフスキーによって翻訳・刊行された。『サー・チャールズ・グランディソン』もA. コンドラトヴィッチによって1793～94年に翻訳された。いずれもフランス語版からの訳であったと考えられる。スターンの翻訳は1779年の『センチメンタル・ジャーニー』の抄訳に始まり、1789年刊行のG. アプフチン訳『エリザへのヨリックの手紙』へと続くが、90年代に入ると彼の小説は多くの雑誌に翻訳掲載された。1793年に『センチメンタル・ジャーニー』がA. コルマコフによって原文より完訳され、1803年にはフランス語版からの訳も刊行された。『トリストラム・シャンディ』は『センチメンタル・ジャーニー』程には評判にならなかったが、1804～07年に原文からの完訳が刊行された¹²⁾。

以上ごく大雑把にイギリス文学が18世紀のロシアに紹介されていった過程を辿ってみたが、今日なお世界で愛読されているイギリス文学の傑作が、当時のロシアで、徐々にではあるが着実に翻訳されていったことが理解される。60年代後半に生まれたカラムジンは、イギリス文学に十分親しみ得る環境の中で成長したわけである。後に彼は、幼い頃からの自分のイギリスへの強い愛着心を説明しつつ、「もし間違いでなければ、小説がそのような思いの主要な根拠でした」¹³⁾と述懐している。ロシアへのイギリス文学の導入の流れが始まる頃に彼は生まれて成長し、次第に自らもその流れに加わり、やがては自己の創造活動への豊かな糧をそこから汲み取ることになる。

III. カラムジンとイギリス文学

1

カラムジンがいつどのように英語を学んだかは明らかでないが、彼が高度の英語力を身につけていたことは疑いの余地がない。そのことは、英会話の難しさを嘆く『ロシア人旅行者の手紙』中の次の一節からも看取できる。「ロバートソンやフィールディング、さらにトムソンやシ

ェイクスピアさえアルファベットを読むように楽々読めても、イギリス人と接するとあなたは何も言えず、何もわからないでしょう。」(369)¹⁴⁾自分自身の読書体験に基づいて発せられたと思われるこの言葉は、西欧旅行に出发した1789年までに、彼が英語に関して、会話力は未熟であっても、読解力において高い能力を身につけていたことを明らかにしている²⁾。

英語からの翻訳の試みを彼は既に十代半ばから始めているが³⁾、刊行されたものとしての最初の訳業は、シェイクスピア作『ジュリアス・シーザー』の翻訳(1787年)であった⁴⁾。これは原本からの翻訳であって、シェイクスピアの戯曲のロシア語訳としては最も古いもののひとつであった。この翻訳には序文があり、それはシェイクスピアの紹介文となっていて、若きカラムジンがいかに彼を理解していたかを示すものとして、興味深い。「シェイクスピアほど深く人間の本性に通暁していた作家は少ない。最も深く秘められている人間の欲望、その最も内奥の衝動、そして各人の情念、各人の気質、各人の人生の特性すべてを、この驚嘆すべき画家ほどに熟知していた者は少ない。彼の華麗なる絵画の全ては自然を直に模倣している。……彼においてはあらゆる等級の人、あらゆる年齢の人、あらゆる情念の人、あらゆる性格の人が、それぞれ独自の言葉で語る。彼は各々の思考に形象を、各々の感覚に表現を、心の各々の動きに最適の言い回しを見いだす。」⁵⁾留意すべきことはカラムジンが20代の初期に早くもシェイクスピアに熱中し、その人間理解の深さと表現の的確さを高く評価していた点である。後にみるように、シェイクスピアに対する彼のこうした評価はその後変わることはなかった。

イギリス文学に対するこの頃のカラムジンの考え方を示すもうひとつの著作として、1787年に書かれ、1792年に「モスクワ・ジャーナル」誌に発表された詩作『ポエージア』がある。ロシアに詩歌の創造の華が開くことを願望し、生涯にわたって自分自身が詩的創作に係わり続けることへの決意を表現したこの詩の中で、彼は歴史上の偉大な詩人を時代順に列挙して、各々の特徴を記している。ここで注目すべきことは、登場する15人ほどの詩人の中で、イギリスの詩人が5名を数えており、しかもギリシャ・ローマ時代から8人が選ばれていることである。このことは、彼が当時の世界の詩歌の中で、イギリス詩をいかに高く評価していたかを、明らかにしている。「ブリテンは最高の詩人たちの母である」と記してから、オシアン、シェイクスピア、ミルトン、ヤング、そしてトムソンの詩作の特徴を順に記述する。先ずオシアンについて次のように記す。「……オシアンの詩は病める心にこの上なき優美なる憂愁を吹き込みつつ、我々を悲しい

表象へといざなう。しかしこの悲しみは心にいとおしく甘美である。」シェイクスピアについては『ジュリアス・シーザー』の序文におけると同様、人間洞察の深さと表現力の卓越性を指摘する。ミルトンについてはアダムの描写の見事さを指摘する。ヤングに関しては次のようである。「あなたは心に芳香油を注ぎ入れ、涙の泉を干して空にする。そしてあなたは我々を死に親しませつつ、生とも親しませるのだ！」最後の詩人として挙げられるのはトムソンである。「自然を愛し、自然を観照し、季節の流れを、そしてその最も繊細な襞を探索して、トムソンは自然の美しさと、四季の魅力を我々に高らかに歌った。」⁶⁾

このようにして、詩『ポエージア』はカラムジンがイギリスの新旧の詩人たちに深い関心を抱き、彼らの作品を愛読していたことを示しているが、この頃彼はトムソンの代表作『四季』の翻訳に自ら取り組んでもいた。そしてそれは雑誌「心と理性のための子供の読物」に順次発表された。すなわち1787年3月に『春』、6月に『夏』、9月に『秋』、12月に『冬』が掲載され、1789年6月に『四季賛歌』が掲載された⁷⁾。

2

イギリス文学に対するカラムジンの熱中を最も明らかに映し出しているのは『ロシア人旅行者の手紙』⁸⁾ (以下『手紙』と略記) である。この著作のイギリスに関する部分は一種の文学紀行と呼んでもよいほどに、作家に関するエピソードに満ちている。主人公はミルトンやポープに縁の地を訪れては、感慨にふけて作詩をするし、宿泊先の小間使いを相手に『クラリッサ』を話題にしたりもする。特に目につくのはスターンについての記述で、『センチメンタル・ジャーニー』や『トリストラム・シャンディ』の登場人物がしばしば引用される。ロシアへの帰路の船中の場面では、主人公はオシアンの詩『カルトン』の翻訳に携わっている。イギリス文学に対する深い愛情と広い知識がなければこうした叙述は不可能であって、それは彼にとってきわめて身近でしかも貴重な存在となっていた。

この『手紙』のイギリスに関する部分には「文学」と題された小論が挿入されており、カラムジンのイギリス文学に対する見解が簡潔にまとめられている。そこで次に、この小論を手がかりに『手紙』に示された彼のイギリス文学観を探ってみよう。

「イギリス人の文学は彼らの性格と同様、多くの**特殊性**を持ち、様々な面で秀でている」(368) と書き出した後に、彼は韻文、戯曲、散文に分類して、著名な作家について論評を加える。まず韻文についてであるが、彼は全般的な評価として次のような感想を述べる。「イギリスの

各詩人の中には、さほど古くはないが、ホメロスの詩に似通った、ある**純朴さ**がまだある。想像力からよりもむしろ心から流れ出るメランコリーがある。何か奇妙な、しかし快い空想性があり、それはイギリス庭園と同様、数多くの意外な事柄を見せてくれます。」(368) 代表的な詩人としてミルトンとJ. ドライデンが挙げられているが、主として論じられているのはトムソンである。「ここは**絵画詩** (Poésie descriptive) の故郷です」と記した後に、トムソンの詩を論評する。「今日までトムソンの**四季**に匹敵できるものはまだ何もない。それは自然を写す鏡と名づけることができる。」「……トムソンはスイスもしくはスコットランドの狩人にでも例えられよう。彼は銃を手にして、生涯森林や密林をさすらい、時には丘や岩の上でくつろいで周囲を見回し、自分の気に入ったもの、自然が彼の心に吹き込むものを、鉛筆によって紙面に描くのです。」(368) トムソンに関しては『手紙』の別の箇所でも、詩作から長い引用を施しており、カラムジンの心酔ぶりがここからも窺える。

次は戯曲についてである。「劇詩においてはイギリス人は一人の作家の著作以外には優れたものを何も持たない」と書き始めて、シェイクスピアを賛美する。彼も全ての作家と同様に、自分が生きた時代の制約を被っているが、真の天才であるゆえに、ホメロス同様永遠に評価されるだろうと主張した後に、彼の著作について次のように記す。「登場人物の莊嚴さと真実性、事件の展開の面白さ、人間の心への**洞察力**、そして偉大な思想は……心ある人々にとって永遠の魅力であり続けるだろう。かくも包含的で実り豊かな、尽きることのない想像力を持った詩人を、私は他に知りません。」(368-369) カラムジンがシェイクスピアの著作を数多く熟読していたことは、『手紙』の他の箇所でも折りにふれてそれらに言及し、賛美していることから、明らかである。『ジュリアス・シーザー』、『オセロ』、『リヤ王』、『アントニオとクレオパトラ』からの引用があり、特に『リヤ王』を引用した箇所では、文例を具体的に示すことによって、他の作家と比較しての彼の優秀性を証明しようとしている。

最後に散文について述べられる。ここで注目に値することは、イギリス人作家を論ずるときに、カラムジンが文学者と歴史家を同列に並べて論じていることである。彼においては文学と歴史がきわめて近い位置を占めているものと思われる。そのことは次の指摘からも明らかである。「同一の国が最も優れた小説家と最も優れた歴史家を共に生んだことは注目に値する。リチャードソンとフィールドینگはフランス人とドイツ人に**人生の歴史**として小説を書くことを教え、一方ロバートソン、ヒューム、ギボン

描写力、思想と文体とによって、最高に面白い小説の魅力を経験した。ツキディデスとタキトゥスの後に、ブリテンの三大歴史家に匹敵できるものは誰もいない。」(369) 18世紀のイギリスの代表的な歴史家である W. ロバートソン、D. ヒューム、そして E. ギボンに関してカラムジンは深い関心を示し、この著作の他の箇所でもこの3人を歴史家の模範として称えている。この文章は後年の彼の生き方と関連づけて考えれば、ことさらに意味深長である。1803年以降彼は文学から遠ざかってロシア史の研究に専念するが、この文章から判断する限り、彼にとって歴史は文学の延長線上にあったと言うこともできる。

イギリス文学に関する批評の最後として、同時代の作家に対する評価が記されるが、それは極めて否定的である。「最近のイギリス文学は全く注目に値しない。ここで今書かれているのは最も月並な小説であり、一方詩人も優れた者が一人としていない。」(369) 詩人ではヤング、散文ではスターンが、イギリスの輝かしい作家群の最後であったと彼は言う。

3

西欧旅行から帰国したカラムジンは出版活動に意欲的に携わり、月刊誌と年刊誌（アリマナフ）を合わせて4種類刊行した。すなわち月刊誌「モスクワ・ジャーナル」を1791年から92年まで、アリマナフ「アグラヤー」を1794年から95年まで、同じく「アオニードゥイ」を1796年から99年まで、最後に月刊誌「ヨーロッパ報知」を1802年から03年まで刊行したのである⁹⁾。これらの刊行物に彼は自作の小説や批評文、そして様々な外国情報などを精力的に発表した。彼がロシアで最初のジャーナリスト、また職業作家と言われる由縁である¹⁰⁾。

帰国後に書かれたイギリス文学に関する論評としては、『手紙』以外に、注目すべきものが2点挙げられる。ひとつは『少女クラリッサ・ハーロフの記憶すべき生涯』と題された論評で、1791年10月に、もうひとつは『トリストラム・シャンディ』のロシア語訳への論評で、1792年2月に、どちらも「モスクワ・ジャーナル」誌に掲載された。それらはリチャードソンとスターンに対するカラムジンの評価が表現されている故に、重要な意味を持つ。

前者は N. オシポフと P. キリジェシェフスキーの翻訳に対する論評であって、カラムジンは翻訳上の問題点を具体的に例示しつつ、訳者たちを厳しく批判する。それと同時に彼はリチャードソンに対する自分自身の感想と評価を披瀝する。「人間の精神の本質を熟達の手で描いた作家としてリチャードソンに栄冠を捧げたのはイギリス国民だけではない」と冒頭に記してから、リチャード

ソンの賞賛者としてルソー、ディドロ、ハラー、ゲレルトの名を挙げる。次に『クラリッサ』を例に取って、リチャードソンの小説の特徴を次のように述べる。「奇怪な出来事にも……官能的な描写にも依存せず……生活のごく当り前な場面以外は何も描かずに、8巻本の面白いロマンを書くためには、細部と性格描写における卓越した技術がもちろん要求される。」¹¹⁾ 性格描写が成功した登場人物として、クラリッサとラヴレスが次のように解説される。「……気だてがよく優しく、善良でも不幸なクラリッサを、我々はとても愛し、心から悼んで泣きます。そして善と悪の性格が不可思議に、しかし自然に結合しているラヴレスは、時には気高く親切であり、時には極悪非道です。——この二人の登場人物はあらゆる読者とあらゆる時代にとっての驚異であり、リチャードソンの魂の創造力の永遠の記念碑になるだろうと、私は言います。」¹²⁾ カラムジンはこの翻訳が刊行される以前にリチャードソンの小説をすでに愛読していた。そのことは『手紙』の中の記述から明らかである。『手紙』には、主人公がロンドンの下宿先の小間使いジェニーを相手にして、『クラリッサ』と『サー・チャールズ・グランディソン』の登場人物を話題にする場面が挿入されている。

もうひとつの論評は『トリストラム・シャンディ』の部分訳に対する批評である。それはきわめて短いもので、しかも翻訳の出来ばえについてはほとんど言及せずに、スターン自身に対する自分の評価を専ら表現している。「スターンは類まれである！ あなたは如何なる大学でかくも繊細に感ずる術を学んだのだろうか？ 如何なる修辞学が我々の心の最奥の奥まで、わずかな言葉で感動させる秘術をあなたに開示したのだろうか？ 如何なる音楽家が、あなたが我々の感情を支配するほど巧みに、弦の響きを支配できようか？」スターンに対する感想をこのように表現した後で、カラムジンは自分自身の読書体験を次のように記す。「何度私は『ル・フィーヴァ』を読んだことだろう。そして何度私の涙がこの物語のページに注がれたことだろう！」¹³⁾ カラムジンは早くからスターンの著作に親しんでおり、『トリストラム・シャンディ』中の一挿話である「ル・フィーヴァ」の物語を、自ら翻訳して、「モスクワ・ジャーナル」誌に掲載してもいた¹⁴⁾。スターンへの心酔ぶりは『手紙』の中に何よりも雄弁に表現されている。「カレー」の場面全体は『センチメンタル・ジャーニー』を下敷に構成されているし、「リヨン」の場面では『トリストラム・シャンディ』の「アマンドスとアマング」の悲恋物語が詳しく紹介されている。その他スターンの登場人物に関する作中の指摘は枚挙にいとまが無いほどである。『センチメンタル・ジャーニー』が『手紙』のモデルのひとつであったこと自体が、スタ

ーンによるカラムジンへの創作上の影響の強さを示す何よりの証拠であるが¹⁵⁾、この翻訳論評はその短さにもかかわらず、スターンの著作に対するカラムジンの内面的な共感を、鮮やかに映し出している。

以上カラムジンとイギリス文学との係わりを、彼の著述に基づきつつ検討してきたが、ここで言及できたわずかな資料だけからも、彼とイギリス文学との深いつながりを看取することができる。そして彼のその後の創作活動に大きな影響を与えた要素として、次の3点をイギリス文学との関連で抽出することができよう。第1点はシェイクスピアとの係わりである。彼は友人から「ロシアのシェイクスピア」¹⁶⁾の異称で呼ばれるほどにシェイクスピアに心酔し、多くの作品を熟読していた。第2点はイギリス近代小説の始祖とされる作家群、特にリチャードソンとスターンへの傾倒ぶりである。第3点はイギリスの歴史家に対する深い関心である。ロバートソン、ギボン、そしてヒュームに対して若い時から関心を寄せ、彼らの著作に歴史と文学の両方の視点から価値を見いだした。カラムジンのその後の創作活動は、イギリス文学に対するこのような関心と知識に強く影響されつつ、展開していったものと考えられる。

IV. 『ロシア人旅行者の手紙』におけるイギリス批評

1

カラムジンは1789年の春から1年半ほどのヨーロッパ旅行を執行した。『ロシア人旅行者の手紙』はこの体験を基にして書いたフィクションの旅行記であるが、大いに人気を博して、海外に本格的に紹介された最初のロシアの文学作品ともなった。ドイツ、スイス、フランス、そしてイギリスを舞台とするこの旅行記の発表は、フランス革命の進展に因むロシア国内の政治状況とも関連して、きわめて長期にわたった。発表は1791年の「モスクワ・ジャーナル」誌への掲載から始まり、1794年と95年度の「アグラヤ」での発表へと引き継がれ、そして残りは単行本として刊行され、1801年に完結を見た¹⁷⁾。イギリスに関する部分の刊行は1794年以降であり、最終稿の執筆時期も同じ頃と想定される。したがってそれは旅の生の感動をそのまま伝えたものでは必ずしもなく、その分イギリスに関する彼の判断は熟成し深化したものになっていたとも言える。憧憬の念を持ってイギリスを訪れ、そのありのままの姿に触れて、驚嘆しつつ幻滅をも覚える心的過程は、18世紀末におけるロシア人のイギリス文化に対する接し方を典型的に呈示している。ここではこの著作に展開されているイギリス批評を、肯定と否定の両側面から検討し、イギリスに対して彼が示した矛盾す

る感情の背景と意義を探ってみたい。

『手紙』は当時西欧で流行していた書簡体形式を採っており、その文体は一種独特のニュアンスを帯びている。そのことを知るために、大英博物館でマグナ・カルタを見た際に感想として著者が記した文章を次に引用してみよう。「私にとって何よりも興味深かったのはマグナ・カルタの原本、すなわちイギリス人と彼らの国王ジョンとの間の名誉ある契約でした。それは13世紀に締結され、彼らの憲法の基本となっています。イギリス人に、それの主要な利点はどこにあるのですか、と尋ねてみなさい。彼は答えるでしょう。『私は好きな所に住みます。自分の所有物に確信が持てます。法律以外には何物も恐れません。』ではマグナ・カルタを開いてみましょう。国王がこの中にイギリス人のためのこれらの権利を誓約したのです。——いつのことでしょう？ ヨーロッパの他の全ての国民が希望のない野蛮状態にまだ浸っていた時にです。」(364)書簡体を採用することによって、理解しやすい、相手に言い含めるような表現が可能になっているが、筆者にとって名宛人は特定の友人であると同時に、広くロシア人一般であったと考えられる。すなわちカラムジンが意図したことは、西欧諸国の先進的な社会状況を、その原理的な考え方も含めて、多くのロシア人に紹介し、理解させることであった¹⁸⁾。その意味でこの旅行記は啓蒙的な色彩を濃く漂わせており、イギリスに関する部分においても、この国の進んだ諸制度や人々の健全な生活ぶりが、ロシアには欠如するものとして紹介されている。

まず政治制度に関する記述であるが、イギリスの政治状況が自分自身の体験に基づいてつぶさに紹介されている。例えば選挙については、「国会議員選挙」と題された小論がある。「7年毎に国会は改選される。私にとって幸いなことに、今が選挙の時期に当たっていた。私はそれを見学した。」(358)こう記した後にウェストミンスター区での選挙の様子が、投票日前夜の接待ぶり、当日の投票風景、開票状況等々、候補者の人物像の紹介も交えて、生き生きと紹介される。国会についても比較的詳しい紹介があり、上院、下院の内部の様子が描かれ、さらに下院での討論の実際が、様々なエピソードを交えて活写される。特に興味を引くのは、ウェストミンスターホールで開かれた弾劾裁判の顛末を伝えた文章である。そこでは元東インド総督がインドで犯したある不当行為をめぐる裁判の様子が、被告や弁護士の挙動も含めて、詳細に興味深く叙述されている。

次に司法制度についてであるが、この点に関してはカラムジンの叙述はイギリスへの賞賛の念に終始包まれている。開催中の刑事裁判を見学しつつ、彼が特に注目することは、判決を下すに至るまでの過程である。そこで

は被告が不利益を被らないための慎重な手続きが配慮されている。「私は先ずロンドンの法廷, Justice-Hall, を訪問したいと思いました。そこではいわゆる**陪審員**, Jury, と裁判官が, 刑事裁判に判決を下すために6週毎に集結します。我が友よ, この点ではイギリスの立法者たちに栄冠を授けて下さい。彼らは残忍な裁判を人間愛によって和らげることができましたし, 無実を救済するためには何事も忘却にふさず, また過度の予防措置をも恐れませんでした。」(339) このように述べた後で, 裁判官, 陪審員, 原告, 被告, そして証人の行動を説明し, 陪審制度の実際を明らかにしつつ, 次のような感想を述べる。「もし『有罪』と判決すれば, 裁判官は法の正しい意味を固守しつつ, 恣意的な解釈にいささかも陥ることなく, 法だけを罪に適用します。それ故イギリスでは, 法そのものが判定しなければ, 最も重い犯罪でさえ罪を課せられないのです。したがってここには他人の命を支配できるような人間はいないのです! 12名の著名な市民の同意無しには, 何人をも断罪できず, 裁くことすらできないのです。それ故にこそイギリス人は何にもまして自国の刑法を誇りに思い, 陪審員制度を神聖で犯さざるものと称しているのです。」(340)

個人の権利, 特に弱い立場の個人の権利を擁護する点でカラムジンはイギリスの司法制度を賞賛するが, このことはこの国の社会事業政策に関しても当てはまる。「今日一日を私はハワード³⁾のように過ごしました——牢獄を観察したのです——イギリス政府の保護政策を賞賛し, 人間に同情し, また人間を厭いもしたのです。」(339) 彼は様々な施設を選んで訪問し, 検分しては評価を与える。こうしてニューゲイト監獄, キングス・ベンチ債務囚監獄, ベドラム精神病院, グリニツダ病院等を次々に訪問しては, 各施設の状況を詳細に観察し, この国に育まれた福祉政策のあり方にしばしば感動する。例えばベドラム精神病院の訪問に際しては次のように記す。「建物内の秩序, 清潔さ, 不幸な人々への世話と奉仕は驚嘆に値します。部屋と部屋の間には温水と冷水の浴場が設置されており, 医師はそれによって治療します。多くの人々が快復しています。そして退院に際しては各患者は心身を強化するために必要な薬を, 無料で受け取ります。」(342) グリニツダ病院を訪問した時の感動はもっと強く表現される。退役船員や病気療養中の船員が収容されるこの施設の様子を説明しながら, 次のような感慨を漏らす。「王様でさえも多くはイギリスの高齢の水兵ほど優雅には暮らせません。」「イギリスには良きものがたくさんあります。しかし全てに優るのは社会的諸施設です。それらは政府の慈悲深い英知を証明しています。Salus publica (国民福祉) がいみじくもその標語です。イギリ

ス人が自分の祖国を愛するのは当然です。」(356)

イギリスの政治状況は『手紙』においてこのように賞賛されるが, 政治を支えるものとして位置づけられているのはこの国の強力な経済力である。カラムジンはイギリスの先進性を政治と経済の両面から捉えていた。「イギリス人は議会と取引所において君臨します。前者において彼は自らに法を与え, 後者においては世界の商業界に法を与えました。」(344) イギリスの経済的繁栄を目の当たりにして, 彼はしばしば驚きを率直に表現している。例えばロンドンを初めて見たときの印象を次のように描く。「長く広い, 滑らかに舗装された通り, 巨石を敷き詰めた歩行者用の道路, 蜜蠟が擦り込まれて鏡のように輝いている家々の上質木製ドア, 両側に間断なく並び立つ噴水……。ごく普通の人々が身につけている衣服のまれにみる清潔さと品の良さ, そしてあらゆるものに共通して見て取れる秩序だった雰囲気——こうしたもの全てが言うに言われぬ快い景観を構成しています。それであなたも, 『ロンドンはすばらしい!』と百回も繰り返してしまうでしょう。パリとどれほど違うことでしょう!」(331) パリと比較してロンドンには清潔さ, 簡素さ, 富の等質性, 乾燥した明るさがあると述べる。夜の照明の明るさに驚嘆しつつ, 「国民の富の驚くべき証明!」(332) と叫んでもいる。

イギリスの富の源泉として把握されるのはその活発な商業活動である。世界各国の商船で賑わうテムズ川を眺めた時の印象を次のように記しているが, その表現からロシアの純朴な若者の率直な驚きを感じられる。「……緑の両岸の間にテムズ川が光っていたが, そこでは無数の船のマストが, まるで落雷で焼かれた森のような姿で林立していた。これこそ世界一の波止場であり, 全世界の商業の中心地なのです!」(330) ロンドンが世界の通商の中心地であるとの実感をさらに強く覚えたのは, 商品取引所を訪問した時のことである。取引の状況を次のように表現している。「ここでは人が人に理由なく言葉を発しませんし, 理由なく握手をしたりもしません。話すと取引が成立し, 握手をすると事が決っせられて, 船はニューヨークに向けて, あるいは希望峰の彼方へ出港するのです。」(344) 類似した感想が東インド会社を訪問した際にも述べられている。「世界で最も豊かで広大な国を, つまり国家をまるごと(こう言うことができます), 個人の会社が完全に支配しているのです。会社は総督その他の長官を選出します。そこに軍隊を維持し, 強国と戦ったり, 条約を締結したりします! これは世界に例を見ないことです。」(364)

後に述べるように, カラムジンはイギリスの海外での活動が無条件で認めていたわけではなく, それに異を唱

えてもいたのだが、経済活動そのものに関しては、啓蒙主義の立場から、それを望ましいものと考えていた。ロンドンの商店街の豊かな品物を見て次のような感慨を漏らしている。「……至る所に大小の豊かな店舗が見られ、そこはあらゆる種類の商品、インドやアメリカ産の貴重品で一杯です。それらはヨーロッパ全体のためにここに数年間蓄えられます。こうした贅沢は心を喜ばせこそすれ、憤慨させることはありません。人間の剛胆さ、諸国民の精神的な近似性、そして社会の啓蒙を驚くべき姿で示しているからです。……通商は数知れぬ多くの人々に糧を与えつつ、世界の活動を活発にし、人間の知性の有益な発見、新しい思想、生活の新しい楽しみ方を、一地域から他の地域へと伝えもするのです。」(336)

最後に、イギリスの文化と家庭生活に対するカラムジンの捉え方を検討してみよう。このことはイギリス社会に対する彼の肯定的評価の中で、最も重要な要素となっている。『手紙』にはイギリス文化に関する記述にも多くの紙面が割かれている。彼は大英博物館、科学アカデミー、シェイクスピア・ギャラリー等を詳細に観察しており、折々の感動を様々なエピソードと共に記している。例えば、ウェストミンスター寺院で演奏されたヘンデル作曲『メサイヤ』を聴いた時の様子を次のように描写している。「600の楽器と300の声が最高の形で調和した演奏を想像したまえ——巨大なホールで数知れぬ多数の聴衆が深い沈黙を保っているのです！ 何と崇高なハーモニーか！ 何と感動的なアリアか！……私はペルゴレーシ、ヨンメッリ、ハイドンの音楽は聞いたことがありますが、ヘンデルのメサイヤほどにはいづれからも感動しはしませんでした。悲しくもあり嬉しくもあり、荘厳でしかも感情豊かでした！」(334)

しかしイギリス文化に対するカラムジンの視点の最大の特徴は、文化が一般の人々の生活に浸透し、そこに息づくものとして捉えられていることである。例えば民衆文化の代表としてのカリカチュアの普及に大いに驚かされるが、さらに強い驚きを覚えたのは、庶民の文化水準の高さを認識した時にであった。「イギリス人は教養があり良識に富むということには同意します。ここでは職人たちがヒュームの歴史を読み、召使いがヨリックの説教やクラリッサを読みます。ここでは売子が自国の商業上の利益について根本的に考察し、そして農民がシェリダンの雄弁について語ります。ここでは新聞や雑誌が都会だけではなく、小さな村々においても、あらゆる人々の手にあるのです。」(381)

文化が一般の人々にこのように普及していることを確認したカラムジンは、教養・文化を人間の幸福の問題と関連づけつつ、次のように主張する。『「イギリス人は教

養がある！』と私が語るのは、ロンドンの聖パウロ大聖堂を目にした時ではありません。……東インド会社の諸店舗の豊かさに驚嘆した時でもありません。そして当地の王立科学アカデミーの集会に列席した時でさえありません。そうではなく、彼らが家庭生活の幸せを享受する様子を眺めながら、『イギリス人は教養がある！』と百回も繰り返す言うのです。」(367)イギリス人の幸せな家庭生活を実例によって紹介しつつ、カラムジンが強調するのは次の点である。「文明の究極の成果は人々を家庭生活にますます結びつけるはずだと、私は常々思っていました。浪費へと我々を引きずり込むのは、精神的な空虚感ではないでしょうか！」(366-367) 実はイギリスの家庭生活の健全性を強調しつつ、カラムジンの舌鋒はロシア貴族階級の社交界への厳しい批判へと向けられる。カラムジンがイギリス体験において、イギリス文化の最も優れた特質を、教養に裏打ちされた健全な家庭生活の中に見いだしたことは、その後の彼の創作活動を考察する上で、念頭に置くべきことと思われる。

2

これまで述べてきたように、『手紙』の中でイギリスは様々な観点から賞賛されている。しかし賞賛されると同じ強度をもってそれは論難されてもいる。そこで次にイギリスに対する否定的な評価を『手紙』の中から拾ってみよう。それは貧困や犯罪等の社会現象的な側面と、国民性に関するものとのふたつに大きく分けて考えることができる。

イギリスにおける貧困の問題はこの著作の中でしばしば提起されている。イギリスにも貧民がいるという認識は、ドーヴァー海峡を渡って、最初に宿泊した宿で早くもカラムジンの心に生じた。一団のイギリス人に金銭を不当にせびられた体験を述べつつ、次のように記す。「4人目、5人目、6人目——全員が要求し、全員が私の財布に対する自分の権利を表明しました。しかし私は2シリングを地上に投げ出して、彼らから逃れました。判断してくれたまえ、ここの人々がお金亡者なのか、それともイギリス人は自分の労働に低く値段を定めているのかを。」(328)カラムジンはパリと較べて貧富の差が小さいとロンドンを誉めているのであるが、テムズ川沿いの貧民窟については次のように叙述している。「テムズ川は大きく美しいけれど、立派な河岸通りはなく(例えばペテルブルグのネヴァ川やリヨンのローヌ川のように)、街の景観に少しも寄与していません。兩岸まで醜い家々が建てられており、そこにロンドンの最貧層の住民が身を潜めています。」(336)またロンドンの住居に多く見られる地下室について説明しつつ、次のような皮肉っぽい感想を述べている。「ロンドンの全ての家に地下室があると知

らねばなりません。……パリでは貧民は雲の下屋根裏部屋までよじ登っていきませんが、ここでは地下へ下っていくのです。貧民はパリでは頭上へ運ばれ、ここでは足で踏みつけられていると言うことができます。」(336-337)

貧困と並ぶ悪しき社会現象として指摘されているものに、多発する犯罪行為がある。スリに関するエピソードは様々な形で紹介されているが、また暗黒都市ロンドンの一面を描いた次のような文章もある。「……ロンドンのいくつかの通りで、私は晩に、まさにパリにおけるよりも多くの恐ろしい淫乱行為を目撃したのです。これ以上は触れませんが（そのことについては話すことだけではできても、記すことはできません）、想像してみたまえ、この地の淫蕩の不幸な犠牲者の中には、12歳の少女もたくさんいたのです！ 想像してみたまえ、メガイラたちがいて、彼女らの所へ残忍な母親たちが娘を連れて来て検査させて、取り引きするのです！」(371) 売春斡旋人をメガイラ（＝復讐の女神）になぞらえつつ大都会の闇の不気味さを強調しているが、貧困と犯罪の問題は後にイギリス文学の重要なテーマのひとつとなる。そしてそれはカラムジン自身のその後の文学とも無縁ではなかった。彼がこの時点でこのような報告を残したことは留意すべきことと思われる。これに関連してもうひとつ留意すべきことは、イギリスで犯罪が多発する理由を考察しつつ、次のように記していることである。「イギリス人は厳しい警察を危惧しており、至るところに番兵やピケ隊を見て収容所のような町に暮らすよりは、むしろ盗まれることを欲するのです。」(360)ここではロシア人とイギリス人の性格の比較がなされており、カラムジンは犯罪の原因をひとつには国民性の問題として捉えているわけである。

国民性の問題はカラムジンにとって重要な関心事のひとつであって、第2の否定的評価はイギリス人の国民性に関するものである。そのことは『手紙』の最後の部分で総轄的に論じられているのだが、そこで彼はイギリスとイギリス人に対する反感と嫌悪を強調する。「第1に私は湿って暗く侘しい気候のために、イギリスで自分の人生を過ごしたくはないでしょう。」「第2に彼らの冷たい性格が私には全く好きになれません。」(380)イギリス人の「冷たい性格」に関する話題は他の箇所でもしばしば取り上げられており、例えばドーヴァー海峡を渡って入国した直後の場面でも、イギリス人に固有とされるメランコリーを話題にして、その原因についての自説を次のように展開している。「イギリス人は如何なる野菜も好まない。**ローストビーフ**、**ビフテキ**が彼らの常食です。それ故に彼らの血液は濃くなります。それ故に彼らは粘液

質、メランコリーになり、自分自身に耐えられなくなって、しばしば自殺するのです。彼らの**スプリー**（＝メランコリー）のこの身体的原因にさらにふたつの他の原因を付け加えることができます。海からの絶え間ない霧と石炭からの絶え間ない煙とです……。」「(329)

カラムジンはこの「冷たい性格」に関連づけて、イギリス人の好ましくない性格、考え方、行動等々を様々な実例を挙げつつ紹介する。例えば、個人の困窮の原因はその人自身の能力にあるとするイギリス人の考え方を紹介しながら、それを次のように非難する。「彼らは……イギリスではあらゆる種類の勤労が程度に応じて報酬を与えられるので、優れた人間は困窮するはずがないと考えます。ここから彼らの間に、『我が国で貧しい者はそれ以上の分け前に値しないのだ』という規則が生まれました——恐ろしい規則です！ ここでは貧困は悪徳とされるのです！」(382) カラムジン自身は困窮に至る原因は他にもあると主張することで、こうした考え方に異を唱える。「度重なる不幸が最も勤勉な人でさえも零落させることがないだろうか？ 例えば病気が……」

次に彼はイギリス人をエゴイストであるとして非難する。「イギリス人は誠実です。……しかし厳格な誠実さは彼らが抜け目のないエゴイストになることを妨げません。彼らは商業、政治、そして互いの私的關係においてエゴイストです。……冷たい人間は概して大エゴイストであると銘記して下さい。彼らにおいては心情よりも知性が活動します。知性は磁石が北を向くごとく、いつも自分自身の利益を志向します。理由も知らずに善をなすのは、我々の貧しい、**非理性的**な心情のなせる業です。」(382) イギリス人の反対の性格を持つ存在としてロシア人が考えられていることが、これらの文章から明らかである。

外国人に対するイギリス人の態度も問題にされる。イギリス人は外国人を蔑視するとの説に、カラムジンは自分自身の体験に基づいて反論しつつも、結論としては次のように記す。「一般的にイギリス国民は我々外国人を何か不完全な、哀れな人間とみなしています。」(383)このことに関連して、イギリスによる海外進出、異国民支配に対するカラムジンの非難を取り上げることができる。元東インド総督がインドで越権行為をしたとの罪で上院で弾劾裁判が開かれ、彼はそれを傍聴した。その時の感想を次のように記す。「イギリス人は自国にあっては人間愛に富んでいます。しかしアメリカ、アフリカ、そしてアジアではほとんど野獣です。少なくともそこでは人間を野獣を扱うように扱っています。お金を貯め込んでから帰国し、それから叫ぶのです。『私を破滅させないでくれ。私は人間なのだから！』」(372)

経済的に豊かな先進国であるが故に生じるいくつかの歪んだ特徴も、イギリス人に固有のものとして紹介される。自殺願望、spleen (メランコリー、不機嫌) や whim (気まぐれ、粹狂) などがそれで、カラムジンはそうした傾向を一種の文明病として捉え、次のように説明する。「幸せが富と十分な物質にあると考える者には、この地に多くいる大富豪を見せねばなりません。彼らは遊樂の手段を湯水のように浴び、あらゆる楽しみに対して興味を失い、死の遙か前から精神的に死んでます。これが英国人のスプリーンののです。」「豊かなイギリス人は退屈から旅をし、……退屈から結婚し、退屈から銃で自殺します。彼らは幸せが原因で不幸なのです。」(383) このような観点からイギリス人の奇行、奇癖の実例を、文明国に生じる新たな病癖として、アネクドット風に詳しく紹介している。

3

『手紙』にはイギリスに対する肯定と否定、賞賛と嫌悪という相反するふたつの感情が交錯して流れているが、こうした感情は旅の最後の場面に組み込まれた次の文章に最も明瞭に表現されている。「イギリスを見ることはとても快い。国民の習慣、文明とあらゆる技術の成果は注目に値し、あなたの知性を捉えて離しません。しかしここに生活して共同生活の満足を得ようとするのは、砂地の谷間に花を探すと同じです。……次回来ても私はイギリスに喜んで到着して、未練を残さず立ち去ることになるでしょう。」(384) 前半の賞賛の部分は、健全な家庭生活、高い文化水準、充実した社会福祉制度、そして文学、歴史その他優れた学問的業績、等々に対する敬意として受けとめることができる。後半の嫌悪感はイギリスの陰鬱な気象、そして特に、イギリス人の「冷たい性格」に起因したものと考えることができよう。ロシアと較べてはるかに進歩していたイギリスに対して、強い違和感を覚えたということもあるかもしれない。「全ての市民制度は国民の性格に適合していなければなりません。イギリスで良いことが他の地においては悪いこともあるでしょう。」(383) 彼はこのようにも書いている。それは明治初年にイギリスを訪問した日本人が両国の大きすぎる隔たりを認識して、イギリスの模倣は必ずしも日本に利益を与えず、と結論した逸話を思い出させる⁴⁾。両者の間には共通する複雑な思いがあったものと考えられる。

しかしカラムジンの場合には単なる違和感とは異なるものがあつた。ロシアへの愛国心がそれで、彼にあっては、イギリスへの反感はロシアへの愛着の裏返ししの表現でもあつた。西欧への旅は彼のナショナリズムを刺激する側面を持っていた。愛国心、すなわちロシアを再認識しようとする心情は、『手紙』の中に時折くっきりと姿を

現している。愛国心の発露が特に目につくのは言語に関して述べた場面であって、彼は自国語を使用しないロシア社交界の慣習に強い憤りを発する。例えば、教養のあるイギリス人がフランス語を使えるにもかかわらず、その使用を潔しとしない姿を紹介した後で、国民が自国語に対して取るべき態度について次のように述べる。「我が国のいわゆる**社交界**においては、フランス語を知らないとい何とも言えないし、何もわかりません。恥ずべきではないでしょうか？ 国民としての自尊心をなぜ持てないのでしょうか？」(338)

同じ心情から発したものと思われる主張に、ロシア語が英語よりも言語として優れているという認識がある。英語の成立の経緯に触れて、それが数個の言語の混成語であることを述べてから、次のように記す。「我が国の言語に名誉と栄光を授けましょう。それは生来豊かであって、外部からの混入物はほとんどなく、誇り高く雄大な大河のように流れます——ざわめき、とどろき——そして突然、必要とあらば、和らぎ、優しい小川のように低くささやき、人間の声の抑揚にのみ含まれている韻律すべてを形成しながら、快く魂に染み入ります。」(370)

言語の比較だけではなく、会話をする際の人間の表情の違いにも触れて、ロシア人への共感、ロシア人であることの喜びを強調する。「ロシア人である私の心は誠実で生き生きとした会話の中で心情を披瀝することを好みます。目の動き、顔の表情の素早い変化、表現力に富む手の動きを好みます。イギリス人は沈黙しがちで冷淡であり、読むように話し、我々の体の全組織を電流のように揺さぶる、あの俊敏な心の願望を、決して表に出さないのです。」(381) このようにして、カラムジンがイギリス人の「冷たい性格」に言及するとき、その反対の性格を持つべき存在として、彼がロシア人をいつも念頭に置いていたことが、明らかである。

カラムジンは『手紙』の中で、イギリスに対して肯定と否定の両方の評価を与えた。肯定的な評価とは、後進国ロシアに欠如していて先進国イギリスでは有効に機能している諸制度を紹介し説明することであって、それは優れて啓蒙的な意味を持っていた。一方否定的評価とはその逆の面、すなわちロシアにはあってイギリスに欠如しているものを指摘することであつた。それはロシアの価値の再認識、つまり愛国心に通じるものであつた。『手紙』に呈示されたこうしたふたつの方向性は、彼の創作活動の全体をも方向づけていると考えられる。

V. おわりに

カラムジンの西欧文化に対する関心はイギリス一国にとどまらず、フランス、ドイツ他各国の文化に及んでい

た。そのことは旅行中に、カント、ヘルダー、ヴィーラント、ボネ、ラファーターら、各国の多彩な文化人との会見を果たしていることから窺える。当時の西欧の最高水準の知的環境に接して、そこからの有益な刺激を享受できる立場に彼は立っていたわけである¹⁾。

そうした中でもイギリスとの関係はとりわけ深いものがあった。若い時からイギリス文学に親しみ、特にシェイクスピアに、そしてリチャードソンとスターンに傾倒した。このことは彼の後の文学活動の展開に、大きな影響を与えた。帰国後の彼の創作活動は時間の流れと共に大きな変化を示している。1792年発表の『哀れなリーザ』はロシア・センチメンタリズムの代表作と目されているように、感傷的、叙情的要素が色濃く漂った作品であるが、1794年に書かれた『ボルンホルム島』になると、怪奇的、ゴシック的色彩を強くして、生粋のセンチメンタリズムの作品とは趣をやや異にしているし、1795年の『シエラ・モレナ』は悲惨な結末の復讐劇の形式をとっている。1802年の『私の告白』はニヒリズムの色彩の濃厚な破滅的人生記であって、さらに最後のフィクションとされる『現代の巨人』は未完に終わった自叙伝風の読物だが、そこにはユーモアとパロディの精神が横溢している²⁾。こうした多彩な作風を可能にしたものとしては様々な要因が考えられるが、西欧文学の多様な形態に通暁していたことが第一の要因として挙げられよう。その中でもイギリス文学は特に大きな役割を果たしたものと考えられる。彼がシェイクスピアとスターンに心酔したことは、後のプーシキンの生き方と共通するものがあり³⁾、ロシア文学はカラムジンを通してイギリス文学の最も優れた部分を吸収し始めたと言えることができる。

もうひとつ彼の関心を引きつけたものとしてイギリスの歴史学があり、この面での影響も文学のそれに勝るとも劣らない。「リチャードソンとフィールドینگは……人生の歴史として小説を書くことを教え、一方ロバートソン、ヒューム、ギボン……最高に面白い小説の魅力を歴史に導入した」という『手紙』に収められた一節は、重い意味を有しており、これらのイギリス歴史家の著作は彼が歴史に関心を深めるのに、また『ロシア国史』の執筆に際しても、少なからぬ影響を及ぼしたものと考えられる⁴⁾。

カラムジンとイギリスとの関係は彼の少年時代に遡る。「イギリス人にまだほとんど会ってもいない頃だが、私が彼らに恍惚となり、イギリスを私の心にとって最も快い国として想像していた時がありました。……勇敢であることはイギリス人であること、寛大であること——然り、感情豊かであること——然り、真の人間であること——然り、と私には思われていました。もし間違いで

なければ、小説がそのような思いの主要な根拠でした。」(380) イギリスへの憧れはイギリス文学に熱中することによって益々高められた。やがてイギリスを訪れ、自分自身の目でイギリスを眺めた。「今イギリス人を真近に見て彼らを公正に判断し、彼らを賞賛します——しかし私の賞賛は彼ら自身と同じくらいに冷めています。」(380) すなわちこの時初めて彼はイギリスを冷静に客観的に判断することができたわけである。このことについてイギリス・ロシア文化交流史のイギリス人研究家 A. クロスは次のように記している。「若き英国狂として出発した人物はまもなく次第に穏健となった。」「カラムジンの初期の英国狂はバランスのとれた英国鼯鼠となった。」⁵⁾ 英国狂 (Anglomania) から英国鼯鼠 (Anglophilia) に変貌を遂げる過程は、ロシアとロシア人を再認識し再評価する過程でもあった。その過程を辿ることによって、自分自身の独自の立場から西欧文化を摂取し消化することが、カラムジンにとって可能となった。

彼は西欧諸国から学びとったものを模倣に終わらずに、内部で成熟させた形で創造に生かすことができた。すなわちイギリス作家を初めとする多くの作家から得た創作技法を、自家薬籠中の物にして、独自の創作活動を展開したのである。そして彼の創作活動が絶えず成長と変化を示したが故に、周囲並びに後世に及ぼした波紋も複雑であった。18世紀も終盤に近づくと、イギリス文化に対するロシア人の理解は急激に広がりと深化を示したが、その頂点を極めた一人として間違いなくカラムジンを位置づけることができる。

註

I

- 1) イギリスに学んだロシア人については次の書に詳しい。A. G. Cross, "By the Banks of the Thames" Russians in Eighteenth Century Britain (Newtonville, Mass., 1980)
- 2) カラムジンの生年については次の論文に依拠した。藤沼貴「カラムジンの文学活動以前の伝記上の二、三の問題」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要 文学・芸術学編』第37号, 1991年)。本稿の執筆にあたっては藤沼氏の諸論文から極めて多くのことを教えられた。
- 3) 本稿はロシア・イギリス文化交流史研究の一環として書かれたもので、下記の拙稿2編の続きを成す。「ロシアにおける J. ウォーカー、C. クレアモント、および G. ボロー——ロシア・イギリス文化交流の一側面——」(『東京工芸大学芸術学部紀要』第1巻, 1995年)；「J. G. バイロンと T. ムアが19世紀ロシア文学に与えた影響について——ロシア・イギリス文化交流史のもうひとつの側面——」(同, 第2巻, 1996年)。
- 4) この問題に触れた研究として次の論文がある。丹辺文彦「カラムジンのロシア語観について」(『一橋論叢』第76巻第3号, 1976年)；「カラムジンの語彙について」(『ロシア語ロシア文学研究』, 1976年)；「『ロシア人旅行者の手紙』におけるカラムジンの同意語の用例について」(金子幸彦編『ロシアの思想と文学』恒文社, 1977年)。

- 5) この作品に触れた研究として次の論文がある。諸橋和夫「『哀れなりザ』の成立」(『ヨーロッパ文学研究』第27巻, 1979年)。
- 6) 研究史を扱った論稿として次のものがある。藤沼「カラムジン研究史概観」(『ロシア語ロシア文学研究』第17巻, 1985年); 「最近20年のカラムジン研究 (一) (二)」(ナウカ社『窓』第55号, 1985年; 第56号, 1986年)。

II

- 1) A. G. Cross, *op. cit.*, p. 175, p. 185 を参照。
- 2) *Ibid.*, pp. 5-34 を参照。
- 3) *Ibid.*, pp. 35-56 を参照。
- 4) A. G. Cross, *Anglo-Russica* (Oxford & Providence, 1993), pp. 82-83 を参照。
- 5) Iu. D. Levin, *The Perception of English Literature in Russia*, trans. C. Philips (Nottingham, 1994), pp. 127-132 を参照。また藤沼「ポーロフ『人間論』のロシア語訳」(『交錯する言語』, 名著普及会, 1992年) を参照。
- 6) Levin, "The English Novel in 18th-Century Russia", *Literature, Lives, and Legality in Catherine's Russia*, ed. A. G. Cross and G. S. Smith (Nottingham, 1994), pp. 147-154 を参照。
- 7) Levin, *The Perception...*, pp. 139-152 を参照。
- 8) Levin, "The English Novel...", pp. 154-156, *The Perception...*, pp. 97-126 を参照。
- 9) Levin, *The Perception...*, pp. 152-155 を参照。
- 10) Levin, *The Perception...*, pp. 159-173; 藤沼「カラムジンによるジェイムス・トムソンの『四季』の翻訳」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要 文学・芸術学編』, 第39巻, 1993年) を参照。
- 11) Levin, *The perception...*, pp. 173-175 を参照。なおこの翻訳については次の論文に詳しい解説がある。藤沼敦子「トマス・グレイの『田舎の墓地にて詠める挽歌』の翻訳——日本とロシアの場合——」(『むうぎ』第7号, 1988年)。
- 12) Levin, "The English Novel...", pp. 157-167 を参照。
- 13) Н. М. Карамзин, Письма русского путешественника, под ред. Ю. М. Лотмана и др. (Л., 1984), стр. 380.

III

- 1) カッコ内の数字は前掲書の引用ページ数を示す。以下同じ。
- 2) カラムジンの語学力については次の前掲論文を参照。藤沼「カラムジンの文学活動以前の伝記上の二、三の問題」。
- 3) Cross, "By the Banks of the Thames"..., pp. 252-253 を参照。
- 4) この翻訳については次の論文に詳しい。藤沼「カラムジンによる『ジュリアス・シーザー』(シェイクスピア作)の翻訳」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要 文学・芸術学編』第36号, 1990年)。
- 5) Н. М. Карамзин, Избранные сочинения (М.-Л., 1964), т. 2, стр. 80.
- 6) Там же, стр. 10-11.
- 7) この翻訳については次の前掲論文に詳しい。藤沼「カラムジンによるジェイムス・トムソンの『四季』の翻訳」。
- 8) 邦訳(部分訳)がある。福住誠訳『ロシア人の見た十八世紀パリ』(彩流社, 1995年)。またこの著作を扱った日本での研究として次の論文がある。藤家壮一「カラムジンとフランス革命」(『北海道大学外国語・外国文学研究』, 1972年); 浦井康男「カラムジンにおける強調の大文字の使用について——パソコンによる文字列検索を利用して——」(『ロシア語・ロシア文学研究』, 1990年); 「カラムジンにおけるエピテットの自動分析について——パソコン上のワードフォーム辞書を

利用して——」(同, 1992年)。

- 9) こうした活動については次の論文に詳しい。Haruko Sugiyama, "Аонида 1", *Japanese Slavic and East European Studies*, vol. 14 (1993); "Аонида 2", *ibid.*, vol. 15 (1994); 杉山春子「ロシア文学の近代化とカラムジンのアリマナフ」(ナウカ社『窓』第97号, 1996年)。
- 10) G. Hammarberg, *From the Idyll to the Novel: Karamzin's Sentimentalist Prose* (New York, 1991), p. 10 を参照。
- 11) Карамзин, соч. т. 2, стр. 111.
- 12) Там же, стр. 111-112.
- 13) Там же, стр. 117.
- 14) Levin, "The English Novel...", p. 164 を参照。
- 15) 例えば, Д. Д. Благой, История русской литературы 18 века (М., 1955), стр. 526-527 を参照。
- 16) 友人 А. А. Петров 夫の表現。Карамзин, Письма..., стр. 501 を参照。

IV

- 1) Н. А. Марченко, История текста "Писем русского путешественника" - Карамзин, Письма..., стр. 607-612 を参照。
- 2) この著作の啓蒙的な役割を指摘した論文として次のものがある。今井義夫「啓蒙思想家としてのカラムジンとフランス革命」(『一橋論叢』第60巻第3号, 1968年); R. B. Anderson, "Karamzin's Letters of a Russian Traveller: An Education in Western Sentimentalism", *Essays on Karamzin*, ed. J. L. Black (The Hague, 1975)。
- 3) J. ハワードは1777年に *The State of the Prisons* を刊行した。邦訳, 川北稔・森本真美訳『十八世紀ヨーロッパ監獄事情』(岩波文庫, 1994年)。
- 4) 今井宏『日本人とイギリス』(ちくま新書, 1994年), 95-122 ページを参照。

V

- 1) この問題を扱った研究として次のものがある。藤沼「作家カラムジンの出発点——ゲスナー『木の足』とハラー『悪の起源』の翻訳」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第13号, 1985年); 「カラムジンのフリーメーソン入会」(同, 第32号, 1986年); 「カラムジンとスイスの哲学者ラファター」(同, 1988年); Ю. К. Бегунов, "Русско-европейские литературные связи эпохи предромантизма", На путях к романтизму, под ред. Ф. Я. Приимы (Л., 1984); S. M. Lewis, J. G. Herder and N. M. Karamzin: A Study of Similarity and Influence (UMI, 1994)。
- 2) 作風の変化を跡付けた研究として次の前掲書がある。G. Hammarberg, *From the Idyll to the Novel*。なお『ボルンホルム島』を扱った最新の(本稿を脱稿した後で筆者が目にした)研究として次の論文がある。杉山春子「カラムジンの小説『ボルンホルム島』の解釈」(『ロシア語ロシア文学研究』第28号, 1996年)。
- 3) カラムジンとプーシキンの関係を扱った研究書として次のものがある。国本哲男『プーシキン』(ミネルヴァ書房, 1988年)。
- 4) カラムジンにおける文学と歴史の問題を扱った研究として次のものがある。Ю. М. Лотман, "Колумб русской истории", Н. М. Карамзин, История государства российского (М., 1988), т. 4; V. Bilenkin, *From Nature to History: N. M. Karamzin in the Context of European Aesthetic Thought* (UMI, 1996)。
- 5) A. G. Cross, "By the Banks of the Thames", *op. cit.*, p. 263.